

# 牛の介護

酪農家の皆さんにとって“牛の腰抜け”というのはそう珍しくはないと思いますが、それが何日点滴をしても立てず、結局そのまま廃用に…という経験も少なからずあると思います。低カルシウム血症（乳熱）や大腸菌性の乳房炎など明確な理由もなく起立不能が続く状態をダウン症候群といい、これといった治療法もないため実際は農家の皆さんによる介護がメインとなります。そこで今回は確認の意味も含め「起立不能になった牛の介護」について書きます。

牛が起立不能に陥る主な原因として、①乳熱や乳房炎など代謝異常や感染症、②滑走などによる骨折や関節の損傷、③難産による神経麻痺や④牛床での圧迫による神経や筋肉の損傷が挙げられます。①では獣医師による治療を最優先しますが、①～④のどの原因であってもすぐに立ち上がれない場合は圧迫による筋肉や神経の二次的な損傷を防ぐため介護が必要です。ただし②のうち固定できない部位の骨折や完全な股関節脱臼では残念ながらほとんどが予後不良でしょう。

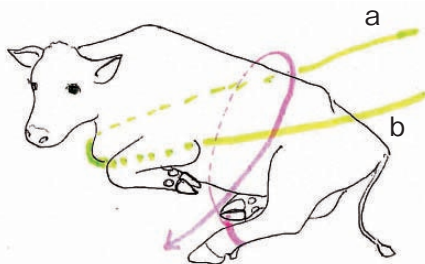
1、介護を始めるにあたって何より重要なのは牛床です。分娩房のように良い環境に居ればいいのですが、そうでない場合は敷料をたっぷり入れ尿溝は鉄板で覆うか乾草などで埋めて後肢や腰が落ちないようにします。立とうとした時に肢が滑ったりはまってしまうと牛は自信を失くし、“立てるのに立てない”という状況に陥ることもあります。

2、開脚傾向の牛はもちろん、そうでなくても起き上がろうともがいて更に筋肉や関節を痛めて終了…という最悪の事態を防ぐため、ロープやスプリットガード（商品名）などで後肢を腰の幅に結んで下さい。これだけで踏ん張りが利いて立てる牛もいます。

3、牛の状態が悪い時や脱臼を疑う場合は悪化させる恐れがあるので、無理やり立たせようとはせず寝返りをさせる程度に留めます。寝返りは1～2時間ごとにさせるのが理想とされていますが、さすがに大変なのでせめて1日3～4回の寝返りと肢のマッサージ（温湿布を使えば効果アップ？）をお願いしたいと思います。吊起で少し腰を上げられれば楽ですが、吊れない場合はロープ（できれば平打ち縄）で行います。（⇒図）1人ではなかなか疲れるので家族で協力して下さいね。

4、吊起は牛の全身状態が悪くなく明らかな骨折や脱臼がなければ、リハビリや診断の助けにもなるので試してみてください。吊っている部分（腰角）の損傷を少なくするため、もくしをかけて短く結びます。腰を吊り上げたら3分程しびれが取れるのを待ち、刺激しても立てない場合は無理させずに寝ていた方向と逆方向へ倒します。吊起を緩めても自力で立てる場合は外して自由にさせますが、ぐらつく場合は再び吊起を効かせて30分後に下ろします。あまり無理をさせると逆に悪化させてしまうかもしれないので優しく優しく…

ざっと書き連ねましたが実際やってみると大変だと思います。介護の悩みは尽きないと思いますが、どんどん近くの獣医師に相談してください。



①（黄緑の線）両前肢のわきの下にロープを通してaとbを交互に引っ張り合ってロープを腹の下に通す

②（ピンクの線）b側のロープの端を後肢の足首に結び、ロープを結んだ肢を軸にしてひっくり返す

次は、厚岸診療課の田中浩子さんにバトンタッチします。

（標茶家畜診療所診療課 大西 美穂）